

てびねり

九月号

平成22年9月1日発行
株式会社ゆしま陶助

特別展 隅田川

〜江戸が愛した風景〜

期間 9月22日〜11月14日

場所 江戸東京博物館



右上「東都両国橋夏景色」
橋本貞秀 安政6年
右下「隅田川舟遊び」
江戸中期19世紀初頭
江戸東京博物館所蔵

浅草寺（観音様）のご本尊は推古天皇の時代（628年）に隅田川で漁をしていた漁師の網にかかったものだったと言い伝えられています。平安時代の伊勢物語で在原業平が隅田川のほとりの都鳥を見て遠い都を思い、涙を流した話などエピソード一杯の隅田川。当博物館が20年以上の年月を掛け収集してきた「絵」「錦絵」「屏風」「絵巻」や他で所蔵している隅田川を描いた名品が一堂に公開されます。江戸の文化や生活の中に根ざした「隅田川」の遷り変りをご堪能ください。

東京スカイツリー

江戸東京博物館から2.3km先の業平橋に、建設中の「東京スカイツリー」があります。現在の高さは420mを越え、雲が低い時は上の方が雲の中に隠れて見えにくいになりました。



江戸東京博物館から近い本所吾妻橋から見た東京スカイツリー（428M）
9月1日撮影

◆今月の制作風景

□高石昌和さん
染付した平鉢に上絵を付けています。また、名品が生まれそうです。



□中河政子さん
大きな鉢作りにチャレンジ。ていねいに真剣に形を整えています。



□山本美津子さん
このところ、アロマポットに挑戦しており、幾つか作っている内に確実に上達しています。



□知久真理子さん
普通の平凡なお皿ではなく、モダンな感じのお皿を作りたいんです。



□一色まりさん
一色さんと云えばすぐ猫ちゃんのお柄を思い浮かびます。今、ぐい呑の削り中ですが、果たして「ねこ」のお柄は？



□加藤美代子さん
形のいいティポットですね。慎重に白マットを吹き付けているところです。



□吉川睦子さん
大きなお皿を2枚作りました。これから素敵なお皿になるようにしつかり削ります。



□佐々由佳さん
新しい形にいろいろ考えながら前向きに挑戦しています。



□夏休み親子陶芸
右：望月かいと君（9歳）
左：望月りく君（10歳）



□夏休み親子陶芸
右：木村伸彦君（7歳）
左：木村順子さん



□夏休み親子陶芸
右：高野龍之介君（4歳）
左：高野勇治さん



□夏休み親子陶芸
右：石井孝子さん
左：江澤梨音ちゃん（10歳）



□夏休み親子陶芸
右：上條大地君（10歳）
中：上條竜大君（10歳）
左：上條朝美さん



□夏休み親子陶芸
右：加曾利潤一郎さん
左：加曾利咲貴子ちゃん



□夏休み親子陶芸
右：大森正子さん
左：大森駿君（7歳）



今月の作品

□奥村千恵子さん 「花入れ」

ねじりを入れた立体感のある作品。新入荷の「藍胤貫入」を吹き付けました。



□山口和江さん 「小鉢」

組小鉢としても使える碗。使いやすい大きさに鉄絵がバランス良く入っています。



□八須智子さん 「抹茶碗」

面取りをして鉄赤を掛け還元焼成した作品。窯で偶然できた窯変が見事です。



□木谷光伸さん 「抹茶碗」

楽茶碗を目指し、黒マットと透明釉を吹き付けた努力賞ものの作品。



□吉川富美子さん 「染付鉢」

吉川さんの染付の初作品。ひさしの形もいいし、すてきな作品です。



□大塚美智江さん 「花入れカバー」

白土の細いひもを編んで辰砂とトルコ釉で仕上げた作品。中の花入れはそれだけでも使える線彫り、白マット仕上げです。



□小林和彦さん 「蛙の置物」

今にも飛び付いて来るようなとてもリアルな蛙の置物。黒化粧をした上に呉須や化粧で柄を入れました。体全体が水にぬれているような表現もさすがです。



□原田起久子さん 「スープ鉢」

たっぷりめのスープ鉢。中を白マット、外は弁柄で線を入れ辰砂を掛け還元焼成しました。



□小窪猛さん 「唐津風大皿」

唐津焼重要文化財「絵唐津松文大皿」を手本に作った小窪さんの力作です。見事です。



□石田純子 「長皿」

ねずみ志野風に仕上げた籠目の長皿です。黒化粧を彫り白萩釉と透明釉を吹き付けました。



□畑山菊恵さん 「色絵鉢」

染付をした後、織部と新しい釉薬の真紅を使って釉彩をしました。とてもきれいな仕上がりのです。



□田口治喜さん 「水指」

角材で表面をたたき、弁柄釉、ルリイラボ釉を掛け仕上げました。



□井口誠子さん 「湯呑」

赤土で作ったシンプルな湯呑。中は白萩、表はルリイラボと辰砂を上手に掛け分けしましたが、焼きがポイントになりました。



□加藤美代子さん 「ポット」

溝を残して削ったポットです。白土で作り、白マットをまだらに吹き付けとてもシンプルで面白いポットになりました。



□小畑明子さん 「だえん皿」

黒化粧した、だえん皿に黒マットを吹き付け黒い焼きが仕上げました。表面のザラザラ感が面白いですね。



□佐藤真理さん 「輪花鉢」

シンプルな作品ほど表現がむずかしいのですが、色も形も素敵できれいに仕上がった輪花鉢です。



見たこと・聞いたこと・読んだこと

《21世紀・戸籍の怪》

〔生年月日欄〕

明治・大正・昭和・平成に江戸を加えました 市役所

という笑話がありました。

足立区千住で白骨死体が見つかった事件は遺族が年金の不正受給で逮捕される事態に発展しました。

長崎県吉崎市ではとうとう200歳の男性が戸籍上生存していることになっていました。100歳以上の所在不明者は兵庫県の119名を筆頭に271人もいたと報道されています。

江戸時代には、お寺が「過去帳」で各家の家族や死者の戒名、俗名、死亡年月日、年齢、続柄などを管理していました。もちろん古い家にはその家の歴史として今も過去帳があります。明治政府になり、戸籍は主に徴税や徴兵のために設けられ「家」制度の根幹になりました。戦後、戸籍法が改正になり「家」から「個人」重視になったという経由があります。



江戸時代から続いている過去帳

昭和10年代までは江戸時代生まれの人はまだ居ましたが、21世紀の平成の時代まで生き残っていることはありえないことなので、各役所の怠慢で除籍手続きが取られていなかったのでしょうか。

明治に入り、廃仏毀釈の運動が起こり、多くの寺院が住民に襲われ破壊されましたが、その際、寺に大事に保管されていた過去帳もかなり失われてしまったといわれています。封建時代の過去帳には土農工商以下の賤民は記載されていなかったのに、特に攻撃の対象になったといわれています。

100歳以上の戸籍がこんなにミスがあるのですから、百歳以下も調査を進めれば、年金不正受給などはかなりの数になるのではないのでしょうか。日本の戸籍制度は世界に誇れるものだと思うのですが、早く軌道修正をして信頼回復を欲しいものです。記 佐藤